

主論文の要約

論文題目 様態と結果の副詞的表現に関する計量的・記述的研究

氏名 難波 えみ (NAMBA, Emi)

論文内容の要約

本博士論文は、現代日本語における様態と結果の副詞的表現について観察、考察を行ったものである。様態と結果の副詞的表現は、ともに動詞句内に表れる点で共通しているが、両者は言及する事態の側面が異なる。様態の副詞的表現は、動作の展開に伴って、動作の過程に内在しうる様々な側面を表したものである。結果の副詞的表現は、動作の結果の側面における対象の様子を表したものである。様態・結果は動作の過程・結果に対応した分類である。しかし、動作に関わる副詞的表現は、様態と結果に完全に分けられるものではない。本博士論文では、動作の過程から結果の側面を述べる多様な副詞的表現について、様態・結果といった動作の展開過程ではなく、副詞的表現の叙述性に着目し、分析を行った。また、本博士論文は、コーパスを用いた計量的な手法と、用例の観察、意味・統語理論により副詞的表現を捉えた。

コーパスによる副詞的表現の分析では、副詞的表現の基本生起位置（第3章）と動詞との共起パターン（第4章）について実証した。まず、基本生起位置について、様態の副詞的表現23語、結果の副詞的表現17語について、新聞コーパスを用い検索した。そして、目的語を伴う他動詞と共起する場合を対象に、副詞的表現の現われる位置を数えた。その結果、様態の副詞的表現は *SAdvOV* と *SOAdvV* に同程度分布していた。他方、結果の副詞的表現は *SOAdvV* に分布の偏りが見られた（全体の8割）。副詞的表現の分布について、様態の副詞的表現は注目する動作の側面の選択、用いる表現の選択は書き手の判断に委ねられるものである。副詞的表現を置く位置も書き手の判断に委ねられるとした。そして、結果の副詞的表現の分布については、結果の副詞的表現と動詞は1つの単位として記憶されているため、動詞の前に分布が偏ると述べた。

また、副詞的表現の分布について、情報の重要度より説明を試みた。並列文における語順と第2文における副詞的表現の省略可能性を観察した。様態の副詞的表現は、目的語と常に情報の重要度が常に相対的に決まる。このような性質のため、話者がより重要と見なすものが動詞の前に置かれる。結果の副詞的表現は、絶対的に情報の重要度が高く、動詞的な述語情報を担う。このような性質のため、動詞の前に起こり、*SOAdvV* に分布が偏る。

また、エントロピーと冗長度の数学的指標により、副詞的表現と動詞の共起パターンを観察した（第4章）。各副詞的表現について、共起する動詞の異なり頻度と述べ頻度を数え、エントロピーと冗長度を算出した。分析の結果、様態の副詞的表現は結果の副詞的表現に比べ、共起する動詞が多様であることが分かった。この結果は、様態の副詞的表現で表される動作の側面の選択は、書き手

の判断に委ねられること、また、結果の副詞的表現が動詞と1つの単位として記憶されている可能性を支持するものである。さらに、個々の数値の類似性に基づくクラスタ分析の結果を行った。また、副詞的表現と動詞の用例を観察して、1つの語が常に一貫して様態・結果を表す語として振る舞わないことを述べた（細かく調べる：様態，細かく切る：結果）。

一般的に、様態の副詞的表現と言われるものについて、用例を観察した（第5章）。そして、叙述性の有無、語の辞書情報の違いにより、典型的動作様態、状態性動作様態1、状態性動作様態2に分けた。

これら3種の副詞的表現について、それぞれ、意味構造における規定を試みた。典型的動作様態は、非常に多様な動詞と共起し、特定の文要素と叙述関係を持たないことから、ACT, BECOME, MOVEなどの意味範疇を修飾すると述べた。特定の意味範疇を指向しないため、典型的動作様態は非常に豊かな語彙である。状態性動作様態1は、動作主の状態（[y BE AT-z]）を表す。状態性動作様態1は、付帯状況節として言い換えられず、述語として用いられるとき、「X（人）は/が Y（状態）だ」の形式になる（社長が冷静だ、友人は愉快だ）。動作主に対する叙述関係を、影山（2002）で提示された「項の補充」を適用し、主動詞の概念構造中の動作主 x に補充した（[λx ([x=y BE AT-z]) ACT...]）。修飾概念[y BE AT-z]の y は被修飾項 x と同一指示であることを、修飾概念 y を「x=y」とすることで示した。また、様態性動作様態2も動作主を指向するが、付帯状況節で言い換えられる。これより、主動詞の概念構造に対して、付帯状況を表す WHILE（影山・由本 1997）により、付帯状況節部分（～になって、[y BECOME [y BE AT-z]]）を表した。また、動作主のある状態への変化について、内在的コントロールが認められたことより、従属する概念構造をの y を「x=y」とできる。「x=y」となることで、主動詞の動作主 x との指示対象の一致が示される。

続いて、これら3種の副詞的表現の統語構造への写像を検討した。受動化操作と動詞との複合名詞化より、典型的動作様態は、目的語と動詞からなる VP に付加するとした。状態性動作様態1・2は、動作主が生起する上層の動詞句 PredP 内に起こる。状態性動作様態1・2は、動作主と叙述関係を持つので、小節構造により、Pred'で、動作主にコントロールされる音形を持たない PRO に対して叙述を行う。状態性動作様態1は、Pred'の小節内に留まる。一方で、状態性動作様態2は、「X は Y（動作性名詞、補文）に Z だ」（学生は{勉強/本を読むこと}に熱心だ）のように述べる性質を有する。補部に動的内容をとる類似性を反映し、Pred'の小節構造から PredP 付加部へ移動すると述べた。このように、様態の副詞的表現は3種に分けられ、それぞれの語の性質が意味構造、統語構造に異なった形で規定されると述べた。

続いて、結果の側面を表す副詞的表現について観察した（第6章）。中でも、結果様態を中心に分析した。結果様態は、その状態が動詞に含意されておらず（豆を甘く煮る）、また、叙述対象が文要素でない場合もある（野菜を大きく切る）。結果様態を叙述対象が項である場合（タイプ1）と叙述対象が項と隣接する名詞句である場合（タイプ2）に分けた。結果様態として認められるものを検討し、その成立条件を述べた。

結果様態の意味構造の規定には、影山(2002)、Kageyama(2002)で提示されたクローン操作を用いた。クローン操作は、元の概念構造の一部あるいは全体をクローン(コピー)し、つぎ足すことで、新たな意味関係の規定が可能となる。結果様態は、有界事象であることより、下位事象[y BE AT-z]を想定できる。結果様態のタイプ1・2は、下位事象[y BE AT-z]をクローンすることで、叙述関係を表すとした。そして、タイプ1(敷物を丸く編む、字を小さく書く)は、クローン元のyと、クローンされたyは同一指示である。他方、タイプ2は(野菜を大きく切る、ジャムを薄く塗る)、クローン元のy(野菜、ジャム)とクローンされたy(野菜の一片、ジャムの層)に、メトニミーが成立する。下位事象をクローンするため、結果様態も結果二次述語同様、「直接目的語の制限」に従うことになる。

統語構造でも、クローン部分に対応する構造を認めた。結果二次述語は、それ自身で動詞化しうのに対して(花瓶をこなごなに割った=花瓶をこなごなにした)、結果様態は、動詞化すると意味が変わる(野菜を大きく切った≠野菜を大きくした)。これより、結果二次述語は、動詞の姉妹位置のVに生成されるとした。結果様態は、動詞句の解釈により、文脈的に判断される。そのため、結果二次述語と区別しVに生起するとした。そして、叙述関係を捉えるために、Vに叙述対象と結果様態からなる小節構造(RPP句)を想定した。タイプ1の場合には、小節内の主語と対象(内項)が同一指示をなす。タイプ2の場合には、メトニミーが成立する。また、クローン操作とRPP句を想定することで、結果様態が経路指向の移動動詞とは共起しないことを説明できることを述べた。

最後に、本研究で対象にした副詞的表現について概観した(第7章)。叙述性に関して、典型的動作様態を中心に、対称性が見られることを指摘した。状態性動作様態1・2、結果様態、結果二次述語は、動作主や対象に対して叙述関係をなす。それに対して、典型的動作様態は、動作のあり方を述べる。特定の要素を指向しない典型的動作様態を言語構造的に無標とし、叙述関係を持つことで、しかるべき位置で叙述関係を成立させる状態性動作様態1・2、および、結果様態は、構造的に有標であるといえる。また、動詞との共起多様性、動詞との距離、状態を表す[y BE AT-z]の現れ方には、連続的な変化を認めた。これらの連続的な変化は、それぞれ意味構造や統語構造上で動機づけられることを述べた。

最後に、本研究で対象とした副詞的表現は、話者の主観的把握(池上2003, 2004他)による言語表現といえる。状態性動作様態1・2、典型的動作様態、結果様態は、程度の差こそあれ、出来事に対する話者の捉え方、感覚・経験に基づき言語化される要素である。このことを、若干ではあるが、客観的な事態把握がなされる英語との対比しながら述べた。最後に、残された課題について述べた。